

森のめぐみを受け取る

文：八代田 千鶴（「野生生物と社会」学会理事・森林総合研究所関西支所）



新緑や紅葉を見に行つて楽しんだり、鳥のさえずりを聞いたり。森林浴という言葉も耳にするようになりました。このように私たち日本人は、森に親しみを感じながら暮らしています。しかし、都会に住む人が多くなった現在、森は遠くにある非日常的なところとなり、日々の生活の中で直接関わることは少なくなつてしまいました。これは、石油の利用といった生活習慣の変化や乱獲による野生動物の激減により、森を利用しなくなった時期が長く続いたことも原因と考えられます。その結果、薪や木材、山菜などの植物、野生動物など森から得られる資源を四季折々に利用していた暮らしも廃れつつあります。

人の関わらなくなった森は草木が生い茂り、かつてないほど豊かになりましたが、その一方で野生動物の急激な増加によつて様々な問題を引き起こしています。これまでの森との関わり方を見直す必要性にせまられているといえるでしょう。現在でも私たちは、春は山菜やタケノコ、秋はキノコといった森の資源を旬の食材として楽しんでいます。同じように、イノシシやシカなどの野生動物も森のめぐみとして受け取ることで、野生動物を巡る様々な問題を解決する道筋が見えてくるかもしれません。野生動物を資源として活用する取り組みは各地で始まっています。本学会でも野生動物とのよりよい関係を目指して活動を進めていきたいと考えています。



宮崎県高千穂町の山間部に位置する集落。森とともに暮らしがある

第19回「野生生物と社会」学会大会 2013年11月28日(木)～12月1日(日)
兵庫県篠山市にて開催！！ 詳細は学会ホームページでご確認ください